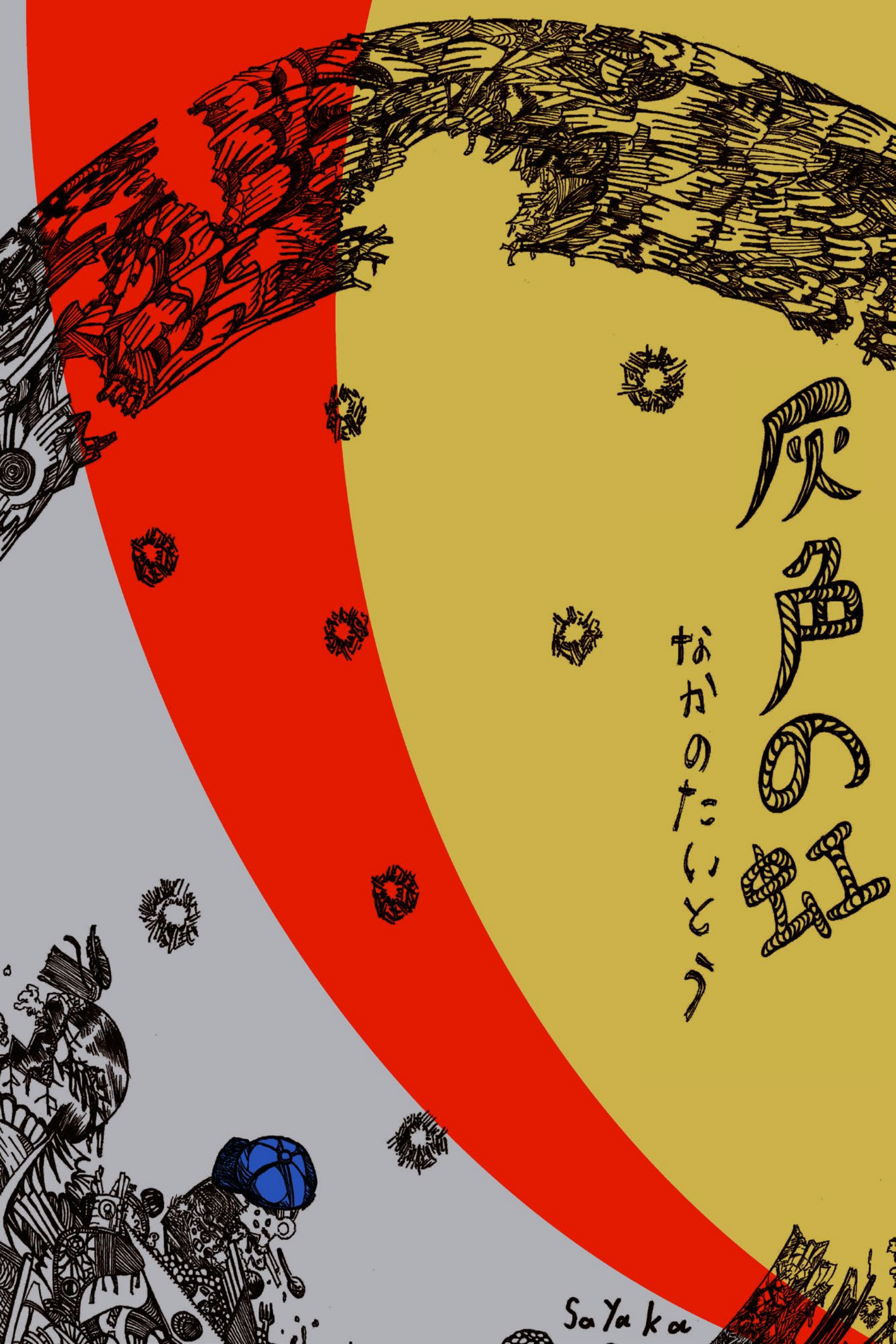


# 灰角の虹

おかのたいとう

Sa Ya ka



くら暗く、つめ冷たい、はいいろ灰色のせかい世界。

ゆき雪のように、た絶えまなく、しんしんと降りつづけているのは、くず崩れてゆこうとしているこの世界の、いたるところからはがれお落ちたむすう無数の、かけらでした。

はい灰のようでもあり、ぼんやりと、ほのかにあわ淡く、き消えてなくなりそうなほどあわかがや淡く輝きながら、ふわりふわりと見あげた空からしず静かに、かけらはお落ちていました。

えいえん永遠に明けることのない夜の空です。

空はやみ闇のように黒いまま。

それに、くず崩れてゆこうとしている、この灰色の世界からはがれお落ちたかけらが、灰色以外の何色になれるはずもありません。

ですからそこは、どこまでいっても灰色だけの世界。

色のない世界でした。

ピリリと音がしそうなくらい凍<sup>い</sup>てついた夜の空気です。

耳を澄<sup>す</sup>ませば降り<sup>ふ</sup>落ち<sup>お</sup>る無<sup>む</sup>数<sup>すう</sup>のかけらの  
奏<sup>かな</sup>でる小さな小さな音が、静<sup>しず</sup>かにそつと聞こえてくるようでした。

降り<sup>ふ</sup>しきる世界のかけら以外<sup>いがい</sup>には何も無い、灰色の世界です。

男の子がひとり、こちらに向<sup>む</sup>かって歩いてきます。

キュッ。キュキュッ。キュッ。

この何もない灰色の世界に、男の子の足音がひとときわ高く<sup>ひび</sup>響いていました。

今日もまた、男の子は崩<sup>くず</sup>れ落<sup>お</sup>ちた世界のかげらを、ひとつ、またひとつと<sup>ひろ</sup>拾い<sup>あつ</sup>集めて、背<sup>せ</sup>負<sup>お</sup>った<sup>ふくろ</sup>袋の中に大切そうにしまっていました。

地面<sup>じめん</sup>には灰<sup>はい</sup>のようなかけらが厚<sup>あつ</sup>く、雪のように降り積<sup>つ</sup>もっています。ほとんどのかけらは、砂<sup>すな</sup>のように細<sup>こま</sup>かいものばかりでした。ですが、ごくまれに、大きなかけらが降<sup>ふ</sup>ってくることがあります。そうした大きなかけらを、男の子は選<sup>えら</sup>んで集<sup>あつ</sup>めているようでした。

キュツ。キュキュツ。キュツ。

男の子は足を止めました。きびしい寒<sup>さむ</sup>さです。かじかんだ自分の手に、男の子はハーッと息<sup>いき</sup>を吹<sup>ふ</sup>きあてます。

すると白い息<sup>いき</sup>は、すぐに吸<sup>す</sup>い込<sup>こ</sup>まれるようにして、冷<sup>つめ</sup>たい夜の闇<sup>やみ</sup>へと消<sup>き</sup>えていきました。

かぶったフードにも、無<sup>む</sup>数<sup>すう</sup>のかけらが厚<sup>あつ</sup>く降<sup>ふ</sup>り積<sup>つ</sup>もっています。男の子はそれを手ではたいて丁<sup>てい</sup>寧<sup>ねい</sup>に振<sup>ふ</sup>りはらうと、顔をあげて空を見あげました。

灰色の世界に住<sup>す</sup>む、灰色の男の子です。

男の子にもまた、色はありません。



男の子はこの灰色の世界の、ただひとり  
の<sup>じゅうにん</sup>住人でした。

高い<sup>とう</sup>塔の下に<sup>そまつ</sup>粗末な<sup>こや</sup>小屋を<sup>た</sup>建て、ずっと  
ひとりで<sup>く</sup>暮らしていました。

その高い<sup>とう</sup>塔も、男の子がひとりで<sup>た</sup>建てた  
ものです。<sup>かんせい</sup>完成には、まだほど遠いはずで  
すが、見あげても<sup>とう</sup>塔の先は見えません。夜  
の空に<sup>む</sup>向かってひとときわ高く、細く<sup>の</sup>伸びて  
いました。

そして塔<sup>とう</sup>は、ちらちらと明滅<sup>めいめつ</sup>を繰<sup>く</sup>りかえしながら、消<sup>き</sup>えてしまいそうなくらいに淡<sup>あわ</sup>く、ほのかに、ほんのり、光っていました。そうやって淡<sup>あわ</sup>く光っているのは、その塔<sup>とう</sup>もまた、はがれ落<sup>お</sup>ちた無<sup>む</sup>数<sup>すう</sup>の光るかけらでできているからです。

男の子は昨<sup>きの</sup>日<sup>う</sup>と同じように今日もまた、背<sup>せ</sup>負<sup>お</sup>った袋<sup>ふくろ</sup>から作<sup>さ</sup>業<sup>ぎ</sup>用<sup>よう</sup>の手<sup>て</sup>押<sup>お</sup>し車<sup>ぐるま</sup>に、拾<sup>ひろ</sup>ってきたかけらを移<sup>うつ</sup>しかえていました。

そしてその手<sup>て</sup>押<sup>お</sup>し車<sup>ぐるま</sup>がいっぱいになったら、塔<sup>とう</sup>にそってぐるぐるまわって上へ上へと登<sup>のぼ</sup>っていく、螺<sup>らせん</sup>旋<sup>せん</sup>になった長<sup>さ</sup>い坂<sup>か</sup>道<sup>みち</sup>を、ひとりで押<sup>お</sup>して、あがっていくのです。



<sup>くず</sup>崩れゆく世界の<sup>ほうかい</sup>崩壊を止めることは、だれにもできません。

その<sup>とう</sup>塔も、男の子が作りあげるそばから、<sup>すこ</sup>少しずつ<sup>くず</sup>崩れていきました。

男の子は<sup>くず</sup>崩れ<sup>お</sup>落ちてしまったところをひとつひとつ<sup>ていねい</sup>丁寧に直しながら、上へ上へと<sup>とう</sup>塔を<sup>のぼ</sup>登っていかなければなりませんでした。

<sup>とちゅう</sup>途中でかけらがなくなれば、また地上におりてきて、ふたたびかけらをひとつ、またひとつと<sup>ひろ</sup>拾い<sup>あつ</sup>集め、<sup>とう</sup>塔に<sup>もど</sup>戻ってまた<sup>のぼ</sup>登ります。

<sup>なんど</sup>何度も、<sup>なんど</sup>何度も、<sup>なんど</sup>何度も、<sup>なんど</sup>何度もです。

気が遠くなるくらいの長い長い時間をかけて、そうやって<sup>とう</sup>塔は、<sup>すこ</sup>少しずつ<sup>すこ</sup>少しずつの伸びていったのです。

明けない夜の世界です。

一日分の<sup>さぎょう</sup>作業が<sup>お</sup>終われば、一日が<sup>お</sup>終わります。

男の子は<sup>こ</sup>小屋に<sup>や</sup>戻ると、わずかばかりの<sup>そまつ</sup>粗末な<sup>しょくじ</sup>食事を取りました。

そして、大切にしまっているたったひとつの<sup>たからもの</sup>宝物を<sup>と</sup>取りだして、長いことじっと<sup>なが</sup>眺めたあとで、<sup>しず</sup>静かに、そっと、<sup>ねむ</sup>眠りにつくのです。

ときにはその<sup>たからもの</sup>宝物をしまい<sup>わす</sup>忘れて、手に<sup>にぎ</sup>握りしめたまま<sup>ねむ</sup>眠ってしまうこともありました。

この世界には、灰色のかけら<sup>いがい</sup>以外のものはありません。

男の子が食べる<sup>そまつ</sup>粗末な<sup>しょくじ</sup>食事もかけらなら、  
男の子の大切な<sup>たからもの</sup>宝物もかけら。それらはみな、  
わたしたちのだれもが<sup>み</sup>見<sup>む</sup>向きさえしない  
いものでした。

<sup>ねむ</sup>眠りがさめれば<sup>つぎ</sup>次の一日のはじまりです。

男の子は、ふたたびかけらを<sup>あつ</sup>集めはじめ  
ます。<sup>あつ</sup>集めたかけらを<sup>つ</sup>積み<sup>かさ</sup>重ね、そうやって<sup>すこ</sup>少しずつ<sup>とう</sup>塔を高くしていくのです。

自分がいつから<sup>とう</sup>塔を作りはじめたのか、  
男の子は<sup>おぼ</sup>覚えていませんでした。自分がなぜ<sup>とう</sup>塔を作ることになったのかも、<sup>おぼ</sup>覚えていませんでした。

それだけではありません。自分が今いくつで、いつ、だれから<sup>う</sup>生まれたのか、そもそもこの世界に、だれか<sup>ほか</sup>他に人がいたことがあるのか、男の子は何ひとつ<sup>おぼ</sup>覚えていませんでした。

そして男の子は、この灰色の世界<sup>いがい</sup>以外の世界がどこかにある、などということを、考えてみたことさえなかったのです。

ある日のことです。

その日も男の子は、世界のかけらを<sup>ひろ</sup>拾い  
<sup>あつ</sup>集めていました。

ふと顔をあげた男の子は、今まで見たこ  
とがないくらい大きなかけらが<sup>お</sup>落ちている  
ことに気づきました。

<sup>ひろ</sup>拾おうと思って、その大きなかけらに<sup>ふ</sup>触  
れた男の子でしたが、さわってみて、ただ、  
もう、びっくりです。

それは<sup>あたた</sup>温かかったのです。

しかもその<sup>あたた</sup>温かさは、自分の体に<sup>ふ</sup>触れた  
ときとまったく同じ<sup>あたた</sup>温かさでした。

男の子は<sup>いそ</sup>急いでその大きなかけらに、  
うっすらと<sup>ふ</sup>降り<sup>つ</sup>積もっていた<sup>すな</sup>砂ぼこりのよ  
うに目の<sup>こま</sup>細かいかけらの数々を、はらいの  
けました。

それは一羽のカラスでした。

カラスは<sup>ねむ</sup>眠ったように目を<sup>と</sup>閉じていて、  
男の子が<sup>ふ</sup>触れても<sup>みうご</sup>身動きひとつしませんでした。  
した。

男の子はカラスを見たことはありません。  
ですから男の子には、それがカラスなのか、  
本当のところは、わかっていませんでした。  
それでも、その<sup>ふ</sup>触れたときの<sup>あたた</sup>温かさが<sup>ほか</sup>他の  
どんなものとも、ちがうということだけは、  
男の子にもすぐにわかったのです。

男の子はカラスを<sup>だ</sup>抱いて<sup>いそ</sup>急いで<sup>こ</sup>小屋に<sup>もど</sup>戻りました。

それからしばらくのあいだ、男の子は<sup>こ</sup>小屋から外に出ることなく、ずっとカラスを<sup>だ</sup>抱いて<sup>す</sup>過ごしました。<sup>お</sup>起きているときも、<sup>ねむ</sup>眠っているときも、<sup>むね</sup>胸に<sup>だ</sup>抱いたカラスの<sup>あたた</sup>温かいぬくもりを感じながら。

せいぜい二、三日の<sup>できごと</sup>出来事だったはずですが、これほどまでに長いあいだ男の子が<sup>しごと</sup>仕事を休んだのは、これがおそらく、はじめてのことでした。



カラスを<sup>だ</sup>抱いて<sup>す</sup>過ごす何日目かの明けない夜が<sup>す</sup>過ぎようとしていました。

男の子は<sup>し</sup>死んだように<sup>ふか</sup>深い<sup>ねむ</sup>眠りについたままです。それだけ<sup>ねむ</sup>眠りが<sup>ふか</sup>深いと、何かが知らないうちになくなっていたとしても、はたして気づくかどうか。

男の子は目をさまして<sup>がくぜん</sup>愕然としました。

カラスがいない!?

<sup>は</sup>跳ねるようにして<sup>と</sup>飛び<sup>お</sup>起きると、男の子は部屋の中をすみからすみまで、くまなく<sup>さが</sup>探しまわりました。もともと何もない<sup>そまつ</sup>粗末で小さな<sup>ほ</sup>掘ったて<sup>ご</sup>小屋<sup>や</sup>です。カラスがいたなら、ひと目でそうとわかるはずでした。

男の子は<sup>なんど</sup>何度も<sup>なんど</sup>何度も自分の<sup>もうふ</sup>毛布をめぐっては、<sup>ねどこ</sup>寝床の上をパンパン、パンパン、手ではたきました。かけらを入れるためにいつも<sup>つか</sup>使っている<sup>ふくろ</sup>袋も、ぜんぶ<sup>うら</sup>裏がえして、もう中に何もないことを<sup>たし</sup>確かめてあるというのに、それでも何かが、もしかしたら出てくるかもしれないと思ってか、プルプル、プルプル、<sup>なんど</sup>何度も<sup>なんど</sup>何度も<sup>ふ</sup>振っていました。大切な<sup>たからもの</sup>宝物を入れた引き出しだって<sup>れいがい</sup>例外ではありません。引っぱり出して、<sup>なかみ</sup>中身をどけて、トントントン、トントントン。ひっくりかえして<sup>うら</sup>裏を<sup>なんど</sup>何度も<sup>なんど</sup>何度もはたいていました。

さいご最後にはとうとうき着ているマントまでぬ  
ぎはじめるしまつです。

男の子は、すっかりはだか裸になって自分の  
せなか背中にカラスがいないかどうかをたし確かめて  
いました。

カラスは見つかりません。

男の子は大きな大きなためいき息をつきまし  
た。男の子は、らくたん落胆することには、なれっ  
こになっているはずでした。

そのときです。

「ああ、やだ。ああ、やだ。やだ、やだ、  
やだ。ここは、なんて気がめい滅入るところな  
んでございましょう」

こや小屋の外でそう声がしたかと思うと、しず  
かに、すうっととびらひら扉が開きました。

カラスです。

外からカラスが入ってきたのです。

カラスは<sup>かた</sup>肩や頭に、うっすらと<sup>ふ</sup>降り<sup>つ</sup>積もった目の<sup>こま</sup>細かい灰色のかけらを、自分の黒い<sup>は</sup>羽<sup>ね</sup>根で、サッ、サッ、サッと、きれいに、はらうと、男の子に<sup>む</sup>向きなおって言いました。

「こんにちは、ぼっちゃん」

男の子は、ただ、ただ、もう、おどろくばかりです。

口をあけても<sup>ことば</sup>言葉は出てきません。

見かねたカラスが先を<sup>つづ</sup>続けました。

「わたしはただのカラスですよ、ぼっちゃん。名前なんてたいそうなものはございません。ぼっちゃんに<sup>たす</sup>助けていただいたことには、まことに<sup>かんしゃ</sup>感謝もうしあげるしだいなのでございますが、どうやらわたしは、とんでもないところに来てしまったようでございます。ああ」

カラスは<sup>さいご</sup>最後に、長いため<sup>いき</sup>息をひとつ、つきました。男の子はそうしたカラスのことを、<sup>しじゅう</sup>始終目をまるくして見ていました。

「よろしゅうございますか？」

カラスが言いました。

男の子はカラスの目を、さらにいつそう  
真剣<sup>しんけん</sup>に、見つめかえしました。

「わたしのいた世界は、ここではござい  
ません。何度<sup>なんど</sup>もうしあげるのは非常<sup>ひじょう</sup>に心ぐ  
るしいのでございますが、わたしは気づい  
たらこの世界に迷<sup>まよ</sup>い込<sup>こ</sup>んでいたのござい  
ます」

カラスは自分のいた世界のことをどうに  
かしてわかってもらおうと、あきらめずに  
何度<sup>なんど</sup>も何度<sup>なんど</sup>も説明<sup>せつめい</sup>していました。

けれども、一生懸命<sup>いっしょうけんめい</sup>、そうした世界、こ  
ことはちがう別<sup>べつ</sup>の世界があるということを  
男の子に話して聞かせても、男の子は首を  
かしげるばかりで、いっこうに、わかった  
そぶりを見せないのです。

「わたしの世界では空は青く、森は緑<sup>みどり</sup>で、  
夕日は赤いのでございます。世界とは、じ  
つに色で満<sup>み</sup>ちあふれているものでございま  
して、その色にいたしましても、日々<sup>ひび</sup>こっ  
こくと変化<sup>へんか</sup>していくのでございます。ぼっ  
ちゃん？ 色でございますよ、色。おわか  
りになりますか？」

わかるはずありません。ここは色のな  
い、灰色の世界なのですから。



「しかたがありませんね」

カラスはそう言うと、考えをめぐらせるために口を閉ざしました。男の子は、そうしたカラスからも目をはなすことはなく、じっと見つめたままでした。

カラスは考えました。自分はたしかに全身まっ黒だけど、胸の中に流れているこの血は赤いはず。

でも、さすがに痛い思いをしてまで「さあ、これがわたしの血です。これが赤い色ですよ」などと言いたくありません。

カラスはふたたび考えました。そういえば、<sup>じまん</sup>自慢のこの<sup>した</sup>舌。この<sup>した</sup>舌だって、<sup>むかしむかし</sup>昔々の  
<sup>むかし</sup>その昔は、ちょっとは赤かったはず。うん、  
そうだ、これなら<sup>いた</sup>痛い思いをしないで、すみ  
そうじゃないですか。

ですが、自分の<sup>した</sup>舌の色がいったい何色  
だったかをカラスが<sup>たし</sup>確かめようと思ってみ  
ても、このくすんだ灰色の世界には<sup>かがみ</sup>鏡どこ  
ろか、キラキラ光る水たまりさえないと男  
の子は言います。

「むむむむむ。しかたがありませんね」

カラスは<sup>とほう</sup>途方に<sup>く</sup>暮れてしまいました。

<sup>こ</sup>小屋の<sup>や</sup>窓<sup>まど</sup>からは、雪の<sup>ふ</sup>降りしきる<sup>まふゆ</sup>真冬の夜  
のような、<sup>さむざむ</sup>寒々しい灰色の世界が見えてい  
ました。<sup>まど</sup>窓といっても、<sup>まどわく</sup>窓枠だけの<sup>まど</sup>窓です。  
ガラスは入っていません。

ぼんやりと外を見ていたカラスが口を<sup>ひら</sup>開  
きました。

「あれれっ？　ぼっちゃん？　なんだか<sup>とう</sup>塔  
の先っぽが<sup>お</sup>折れて、<sup>お</sup>落っこちてきたようで  
ございますよ」

本当でした。どうやら男の子は、さぼり  
<sup>す</sup>過ぎたようです。<sup>とう</sup>塔は男の子がしょっちゅ  
う手をかけて直してやらないと、すぐに<sup>くず</sup>崩  
れてしまうのです。

ズズーン。

これでおそらく、ひと月分くらいの男の  
子の<sup>さぎよう</sup>作業が無駄<sup>むだ</sup>になってしまったはずです。

その日からでした。

その日から、男の子が<sup>とう</sup>塔を<sup>きず</sup>築くかたわらで、カラスは<sup>しじゅう</sup>始終、おしゃべりをして<sup>す</sup>過ごすようになったのです。

男の子は<sup>いぜん</sup>以前と<sup>か</sup>変わることなく、かけらを<sup>ひろ</sup>拾い<sup>あつ</sup>集めては<sup>とう</sup>塔を直し、あるいは<sup>つ</sup>積みあげて、毎日毎日、休むことなく<sup>はたら</sup>働いていました。

でもカラスは何もしません。ただ男の子のあとをついてまわって、<sup>えんえん</sup>延々とおしゃべりをするだけでした。

「ぼっちゃん？　今、お話ししても、よろしゅうございますか？」

カラスは、いつもそう言って、男の子に話しかけてきました。

カラスは自分のいた世界について話しをするのが好きでした。

「どうぞございましょう。ぼっちゃんには、  
ご想像<sup>そうぞう</sup>いただけないことなのかもしれない  
のでございますが、わたしは、わたしとまっ  
たく同じ、たくさんのカラスといっしょに  
暮<sup>く</sup>らしていたのでございします。本当に、お  
どろくほどたくさんのカラスたちでござい  
ました。家は小<sup>こ</sup>高<sup>た</sup>い山のふもとの雑<sup>ぞう</sup>木<sup>き</sup>林<sup>ばやし</sup>の  
中にございまして、夜がもうまもなく明け  
るという明けがたになりますと、みなで羽<sup>は</sup>  
ばたいて、いっせいに、薄<sup>うす</sup>い紫<sup>むらさき</sup>色<sup>いろ</sup>の明けの  
空に向<sup>む</sup>かって飛<sup>と</sup>び立つのでございします。

それはそれは、にぎやかでございますよ。

そして、ぼっちゃんと同じ、人のたくさん

<sup>す</sup>住む町までひとつ<sup>と</sup>飛びいたしまして、朝一

番の<sup>だいだいいろ</sup>橙色のお日さまの<sup>かがや</sup>輝きを<sup>とおめ</sup>遠目に見なが

ら、お<sup>なかま</sup>仲間たちといっしょに<sup>ちょうしょく</sup>朝食をいただ

くのでございます」

　　どうやらカラスは、色にまつわる話しがとても好きなようでした。カラスの話しの中には色の名前がたくさん出てきました。

　　カラスは、天をサッと、はくように、

<sup>は</sup><sup>ね</sup>羽根を広げました。



「ぼっちゃん？ わたしの世界では、夜になりますと、たくさんの星が、人知れず出てまいりまして、この広い夜空をうめつくるのでございます」

カラスにつられて男の子が空を見あげます。

「ご想像<sup>そうぞう</sup>いただけますでしょうか？ この空にでございます。そしてときには月が白く黄色く、まあるく輝<sup>かがや</sup>くのでございます。そうしたときの空の色は、ここのような黒ではございません。藍<sup>あいいろ</sup>色ともうしまして、それはそれは深<sup>ふか</sup>い青色となつて空が光り輝<sup>かがや</sup>くのでございます」

カラスは男の子といっしょになって空を見あげていました。その口から、ため息<sup>いき</sup>がもれてしまいます。

「あのう、ぼっちゃん？　ひとつ、うかがってもよろしゅうございますか？　どうぞございましょう。わたしの舌<sup>した</sup>は、何色でございましょうか」

カラスはそう言うと、舌<sup>した</sup>をエーッと突きだしました。

男の子に色を教えることをカラスは、すでにあきらめていましたが、黒と灰色のちがいや、かけらが光るときに、ほんの<sup>いっしゅん</sup>一瞬だけあらわれる、白については、男の子に<sup>せつめい</sup>説明していました。ですから、もし<sup>かり</sup>仮に、カラスの<sup>した</sup>舌がそれ<sup>いがい</sup>以外の見たことのない色だったとしたら、そのときは、見れば、すぐにわかるはずでした。

男の子はジーッとカラスの<sup>した</sup>舌を見つめたあとで、答えました。

黒。

「やはりそうでしたか。じつは、さきほど思いだしたのでございます。わたしの<sup>した</sup>舌が赤かったのは、わたしがまだ、おさない子どもだったころのことです。わたしがひとり立ちをして、お<sup>かあ</sup>母さまと<sup>わか</sup>別<sup>わか</sup>れ別れになってからというもの、わたしの<sup>した</sup>舌はすっかり黒くなってしまったのでございます」

カラスは、ため<sup>いき</sup>息をつきました。

「ぼっちゃん？　そういえば、ぼっちゃんには、お<sup>かあ</sup>母さまは、いらっしゃらないのでございしょうか？」

カラスが聞きました。

男の子が、かけらを<sup>ひろ</sup>拾う手を休めます。  
ただ首をかしげるばかりでした。

「ああ、はいはい。そうでした。  
ぼっちゃん？ お<sup>かあ</sup>母さまともうしますのは、  
わたしたちを<sup>う</sup>生んでくださったおかたのこ  
とでございますよ。わたしも、わたしのお  
<sup>かあ</sup>母さまから<sup>う</sup>生まれたのでございます。ただ、  
ぼっちゃんとちがいで、わたしの<sup>ばあ</sup>場合  
<sup>たまご</sup>は卵でございますが」

カラスは、お<sup>かあ</sup>母さんのことまで男の子に  
<sup>せつめい</sup>説明しなければなりませんでした。男の子  
は何ひとつ知らなかったのです。でもカラ  
スは、そうした男の子にも、いやな顔ひと  
つ見せず、やさしく<sup>ていねい</sup>丁寧に、ひとつひとつ  
<sup>せつめい</sup>説明していました。

「ぼっちゃん？ それにしても、このかけらは、いったいどこから降<sup>ふ</sup>ってくるのでございましょうね？ 大きいのに、小さいの。もひとつ小さいの。どうやらみな、ふわふわなようでございます」

カラスは、口にくわえたかけらをパクツと飲<sup>の</sup>み込<sup>こ</sup>みました。

「うん、あまい。これもあまくて、これもあまい？ ペツ！ ペツ、ペツ！ にがいの、ペツ！ ああ、まずい。なんとまあ、<sup>あじ</sup>味はともかく、中には食べられるものもあるようでございますから、不<sup>ふ</sup>思<sup>し</sup>議<sup>ぎ</sup>なものでございます。はてさて、これらのかけらとは、いったいなんなのでございましょうね？」

むずかしい<sup>しつもん</sup>質問です。男の子に答えられるはずありません。

「ああ、ぼっちゃん、お気になさらないでくださいな。わたしのつまらない、ひとりごとでございます」

空を見あげるカラスの<sup>よこがお</sup>横顔を、男の子は、じっと見つめていました。時が<sup>しず</sup>静かに<sup>なが</sup>流れていきます。この灰色の世界には、そんなふたりしかいないのです。

「ぼっちゃん？　もしわたしがいなくなってしまったら、ぼっちゃんは<sup>かな</sup>悲しんでくださいますか？」

<sup>ま</sup>舞い<sup>お</sup>落ちる<sup>むすう</sup>無数のかけらが、空の上から、やむことなく<sup>ふ</sup>降り<sup>つづ</sup>続いていました。



「いいえ、ぼっちゃん。もしもの話しでございます」

そんなある日のことです。

一日分の仕事しごとを終えた男の子は、小屋こやで  
カラスとふたり、むかいあって食事しょくじをとっ  
ていました。

食事しょくじを用意よういするのも男の子でした。カラ  
スは男の子が集あつめたかけらをただ突つっつい  
て食べるだけです。

「ぼっちゃん？ この灰色のかけら、見た目はまるで紙<sup>かみ</sup>か何かの燃<sup>も</sup>えかすのようでございますから、たとえこの天<sup>てん</sup>地<sup>ち</sup>がひっくりかえったといたしましても、わたしたちの食べられそうなものに見えるなんてことは、まずないと思うのでございます。もし、ぼっちゃんがいらっしやらなくて、わたしひとりでございましたら、はたして食べてみようなんて気になれましたかどうか」

カラスは一番大きなかけらをひょいと、つまみあげて、パクッとひとのみ飲<sup>の</sup>み込<sup>こ</sup>みました。

「ああ、おいしい。ぼっちゃん？　たいへんおいしゅうございます。ぼっちゃんは、おいしくいただけるかけらを見つけてくるのが、本当に、おじょうずでございますね」

そう言うと、カラスはさらにもうひとつまみ、かけらをつまむと、ゴックンと飲み込みました。カラスのおしゃべりは続きます。

「でも、ぼっちゃん？ どうしてこれらの  
かけらは、どれもこれもみな、ふわふわっ  
として<sup>かる</sup>軽いものばかりなんでございませう。  
ぼっちゃんが毎日<sup>とう</sup>塔に<sup>つ</sup>積みあげてい  
らっしゃる、あのたくさんのかけらにいた  
しましても、見た目ほど<sup>おも</sup>重くはないようで  
ございます。おどろくべきこととございま  
すね。このような<sup>かる</sup>軽いものばかりで、あの  
ように大きくて、どっしりとした高い<sup>とう</sup>塔が  
<sup>きず</sup>築かれているのでございますから」

カラスは<sup>かんしん</sup>感心したように<sup>なんど</sup>何度も<sup>なんど</sup>何度も、  
うなずいていました。

「ぼっちゃん？　そういえばこの世界には何かこう、手にしてみますと、ずしりと<sup>おも</sup>重たいものは、ないのでございましょうか」

カラスが聞きました。

男の子は立ちあがります。

どうやら男の子には、何か思いあたるふしがあるようでした。<sup>しょくじ</sup>食事の<sup>とちゅう</sup>途中でしたが男の子は立ちあがると、<sup>こ</sup>小<sup>や</sup>屋にひとつあるっきりの引き出しの前に<sup>む</sup>向かいました。そして、引き出しの中から<sup>みじか</sup>短い<sup>ぼう</sup>棒のようなものを取り出したのです。

それが、男の子の大切な大切な<sup>たからもの</sup>宝物でした。

<sup>ほか</sup>他のどんなものともちがう、かけがえのない<sup>たからもの</sup>宝物でした。

ふわふわっとして<sup>かる</sup>軽かったりすることもあります。

それだけは、ずしりと<sup>おも</sup>重たかったのです。  
<sup>ふ</sup>触れると、ひんやりと<sup>つめ</sup>冷たくて、この世界にある<sup>ほか</sup>他のものと同じように、ちらちらと光ることもなく、時間がたっても<sup>くず</sup>崩れていくことのない、ただひとつのもの。

「ぼっちゃん？　どうか、ぼっちゃんのその大切な<sup>たからもの</sup>宝物を、<sup>はいけん</sup>拝見させていただけないでしょうか」

カラスがそう聞くと、男の子は、うなずきました。

カラスは、それを突<sup>つ</sup>ついてみたり、においをかいでみたり、ペロツとなめてみたりして、いろいろと確<sup>たし</sup>かめはじめました。

「まちがいありません、ぼっちゃん。これは鉄<sup>てつ</sup>でございます。鉄<sup>てつ</sup>でできた、ねじというものでございます。もつとも、ねじにしては、しょうしょう大きいようでございますから、ボルトと呼<sup>よ</sup>ばれるたぐいのものになるのかもしれませんが。さびてはいないようでございますが、すっかりくすんで灰色になってしまっているようでございます」

そう言うと、カラスは自分の爪<sup>つめ</sup>や羽<sup>は</sup>根<sup>ね</sup>をつか<sup>つか</sup>使<sup>す</sup>って、ほんの少<sup>すこ</sup>しだけ、ねじの頭<sup>み</sup>を磨<sup>みが</sup>いてみました。



ねじが<sup>かがや</sup>輝きはじめます。

まわりにある<sup>あわ</sup>淡い光りを<sup>あつ</sup>集めて、<sup>はんしゃ</sup>反射して、キラッ、キラキラッ、キラッと、<sup>かがや</sup>輝いたのです。

それは、きらめくような、まばゆい<sup>かがや</sup>輝きでした。

はじめて見る<sup>かがや</sup>輝きでした。

それまで一度も見たことのない<sup>かがや</sup>輝きでした。

男の子はその<sup>かがや</sup>輝きに、すっかり<sup>み</sup>魅せられてしまったようでした。

<sup>いっしゅん</sup>一瞬たりとも目をはなすことができないようでした。

「ぼっちゃん？ わたしもあれこれとこの世界のものを<sup>ぎんみ</sup>吟味してまいりましたが、このようなものはこの世界では見たことはありません。ずしりと<sup>おも</sup>重たくて突っついても<sup>こわ</sup>壊れないくらいかたく、そしてなにより、キラッと<sup>かがや</sup>輝いています。これは、まちががなく人の作ったものでございますし、わたしの世界には<sup>かぞ</sup>数えきれないくらいたくさんあるものでございます。わたしの考えで、たいへんもうしわけないのでございますが、わたしは、このねじは、わたしと同じく、わたしの世界からこの世界に<sup>まよ</sup>迷い<sup>こ</sup>込んだものだ<sup>かくしん</sup>と確信しております」

それを聞いた男の子は、サッと、<sup>いきお</sup>勢いよく、うしろを<sup>ふ</sup>振りかえりました。そして跳<sup>は</sup>ねるようにして<sup>まど</sup>窓<sup>べ</sup>辺へ<sup>か</sup>駆けよると、<sup>まど</sup>窓から<sup>み</sup>身を<sup>の</sup>乗りだして<sup>とう</sup>塔の上の上のさらに上、あらゆるかけらが<sup>ふ</sup>降ってくる、そのみなもと。<sup>えいえん</sup>永遠に明けることのない<sup>しっこく</sup>漆黒の<sup>やみ</sup>闇の夜空を見あげました。

「やはりそうでございましょうね。わたしも、そしてこのねじも、こうして<sup>ふ</sup>降りしきる、このかけらと同じように、あの空の上から<sup>お</sup>落ちてきたと考えたほうが、<sup>しぜん</sup>自然でございましょうね」

<sup>ふ</sup>降りやむことのない灰色のかけらが、灰色の世界に<sup>ふ</sup>降り<sup>つづ</sup>続いていました。

<sup>ねむ</sup>  
眠れない夜。

<sup>つか</sup>疲れはてて<sup>ねむ</sup>眠ってしまった男の子は、<sup>ゆめ</sup>夢  
を見ることになります。

おそらくは、それが、男の子の見た<sup>さいしょ</sup>最初  
で<sup>さいご</sup>最後の<sup>ゆめ</sup>夢です。

<sup>ゆめ</sup>夢の中で男の子は、たくさんのカラスた  
ちといっしょになって、いっせいに、<sup>むらさきいろ</sup>紫色  
の明けがたの空へ<sup>む</sup>向かって<sup>は</sup>羽ばたいていま  
した。

男の子の<sup>せいかつ</sup>生活が<sup>か</sup>変わります。

男の子は<sup>ねむ</sup>眠らなくなったのです。

男の子が<sup>ねむ</sup>眠りにつかなければ、この明けない夜の世界に<sup>あした</sup>明日は来ません。男の子は休むことなく、ただひたすらに、<sup>とう</sup>塔を作る<sup>さぎょう</sup>作業に<sup>ぼっとう</sup>没頭するようになったのです。

<sup>すこ</sup>少しでも高く。

いっこくでも<sup>はや</sup>早く。

見ているだけで男の子のそうした思いが<sup>つた</sup>伝わってくるようでした。

それほどまでに<sup>いっしょうけんめい</sup>一生懸命、男の子は<sup>はたら</sup>働くようになったのです。

男の子は<sup>とう</sup>塔を高くしていけば<sup>ぜったい</sup>絶対に、カ  
ラスのいた世界に行けるものだ<sup>しん</sup>と信じてう  
たがいませんでした。その世界からやって  
きたものは、いまやカラスだけではないの  
です。あのねじ。そう、男の子が長いあい  
だ大切に<sup>たからもの</sup>してきた宝物も、その同じ世界か  
ら、ひそかにやってきていたのです。

それだけではありません。

男の子のその世界への思いをさらにかきたてていたのは、それまで、とりとめもなく聞いていた、カラスのなにげない話しの数々でした。<sup>さいしょ</sup>最初にそれを聞いていたとき、男の子には、それがなんのことだか、さっぱりわからなかったはずです。ですが今、こうして灰色のこの世界とはまったくちがう<sup>べつ</sup>別の世界があるということを<sup>かくしん</sup>確信してからというもの、そうしたカラスの話しのすべてが、すうっと水のように男の子の中に広がって行って、そのまま<sup>えすがた</sup>絵姿となり、頭の中に<sup>せんめい</sup>鮮明に思い<sup>えが</sup>描けるようになっていったのです。

男の子をとくにはげしくかきたてていたのは、<sup>つぎ</sup>次の話しでした。

「ぼっちゃん？ わたしのいた世界には、それはそれはたくさんの<sup>い</sup>生きものが<sup>く</sup>暮らしているのです。十や二十じゃございません。百や二百でも、千や万でも、<sup>おく</sup>億でもございません。それこそ星の数より多くの<sup>い</sup>生きものが、みないっしょに<sup>く</sup>暮らしているのです。ぼっちゃんのような人間のお子さんだけでも、きっと<sup>すうおく</sup>数億はいることではございましょう」



ああ、なんということでしょう。カラス  
がカラスの仲間<sup>なかま</sup>たちといっしょにいつせい  
に雑木林<sup>ぞうきばやし</sup>から飛び立<sup>と</sup>っていったように、そ  
こへ行きさえすれば、男の子は自分とまっ  
たく同じ、人の子たちといっしょに、町の  
中、公園の中、さらにはカラスが住<sup>す</sup>んでい  
たという雑木林<sup>ぞうきばやし</sup>の中をだって、自由<sup>じゆう</sup>に駆け  
まわることができるのです。どこまでも、  
どこまでも、どこまでも、どこまでも。もう、  
ひとりぼっちなんかじゃないのです。みん  
なみんないっしょです。数<sup>かず</sup>えきれないくら  
いたくさんの仲間<sup>なかま</sup>たちと、いっしょなので  
す。

男の子は、自分の持<sup>も</sup>てる力のすべてをつぎこんで、働<sup>はたら</sup>きに働<sup>はたら</sup>き、さらにもっと働<sup>はたら</sup>いて、塔<sup>とう</sup>を高く高く積<sup>つ</sup>みあげていきました。  
眠<sup>ねむ</sup>らずに、休まずに、ときには食べるこ  
とさえ忘<sup>わす</sup>れて。

そういった男の子を見ていて、カラスは  
だんだん心配<sup>しんぱい</sup>になってきました。

ですがカラスが男の子の気をそらそうと  
思って、とっておきの話しの数々をそれ  
こそ、つきることなくしてみたとしても、  
結<sup>け</sup>局<sup>つぎよく</sup>は無駄<sup>むだ</sup>に終<sup>お</sup>わってしまったはずです。

男の子の胸<sup>むね</sup>の中は、まだ見ぬ世界への思  
いで、いっぱいだったのです。

ぼくは、もう、ひとりぼっちじゃ、ない  
んだ。

あの空の向<sup>む</sup>こうには、きっと、たくさん  
の仲間<sup>なかま</sup>たちがいるんだ。

会いたいなあ。

会いたい。

会いたいよ。

ま<sup>ま</sup>待<sup>ま</sup>ってて、みんな。

ぼくは、今、そっちに行くから。

かならず行くから。

だから、ま<sup>ま</sup>待<sup>ま</sup>ってて。

だから、ま<sup>ま</sup>待<sup>ま</sup>ってて。

とう塔は今まで見たことがないくらい、高く高く、そびえたちました。

ですがとう塔はまた、今まで見たことがないくらい、細く細くなっていきました。

さいわいなことに、この灰色の世界に風はふきません。けれども、もし風がふいたら、すぐにでもとう塔はポキリとお折れてしまったことでしょう。それほどまでに高く、高く、細く、とう塔はの伸びていったのです。

あまりにも細すぎて、今ではもう、男の子はとう塔の上まで登れなくなっていました。ですから細く長くの伸びたとう塔の上にかけらを積みあげるのは、カラスのやくめ役目だったのです。

男の子は<sup>とう</sup>塔の一番下から<sup>て お</sup>手押し<sup>ぐるま</sup>車を<sup>えんえん</sup>延々と<sup>お</sup>押し、<sup>お</sup>押し、<sup>のぼ</sup>登れるぎりぎりのところまで<sup>のぼ</sup>登って行って、そこに、<sup>はこ</sup>運んできた中身をあけます。

するとカラスが、そこから<sup>とう</sup>塔の上まで<sup>なんど なんど</sup>何度も<sup>おうふく</sup>往復して、男の子が<sup>はこ</sup>運んできたかけらを、きれいに、ぜんぶなくなるまで、ひとつ<sup>のこ</sup>残らず口にくわえて、上に<sup>はこ</sup>運んでいくのです。

それは、男の子にとっても、カラスにとっても、たいへんな<sup>さぎょう</sup>作業でした。

カラスは、なにも男の子にたのまれたから、そうやって手伝いをしているわけではありません。カラスはもう、見ていられなくなっただけです。

気づくと、カラスは男の子を手伝っていました。

そして気づくと、ふたりは同じ目標<sup>もくひょう</sup>に向<sup>む</sup>かっていっしょに働<sup>はたら</sup>いていたのです。

ふたりがともに目ざしていたのは、この空の上にあるかもしれない別<sup>べつ</sup>の世界。カラスの生<sup>う</sup>まれ育<sup>そだ</sup>ったふるさとにして、男の子がすべてを投<sup>な</sup>げうってでも、どうしても行きたいと願<sup>ねが</sup>う場<sup>ば</sup>所<sup>しょ</sup>。

そう、どんなにつらくても、男の子はあきらめませんでした。そして、そうやって、あきらめずに、ずっと<sup>つづ</sup>続けてこれたからこそ、ここまで<sup>とう</sup>塔を高くすることができたのです。そして今もまだ、あきらめていないからこそ、これから先もずっと、<sup>つづ</sup>続けていけるのです。

でもカラスは、うすうす気づいていました。

この<sup>とう</sup>塔をいくら高くしてみたところで、<sup>べつ</sup>別の世界どころか、この世界のどこへだつて、たどりつかないかもしれないことに。

とう  
塔の先を見ているのはカラスだけでした。  
どれほどとう  
塔が高くなろうとも、空はまださ  
らに高く、どこまでいっても、はてがない  
かのようにでした。

ね  
寝ずにはたら  
つづ  
働き続けている男の子の顔は、も  
う目もあてられないありさまでした。

ほおがすっかりこけてしまい、目の下の  
くまは、どうやったってき  
消えそうにないく  
らい、まっ黒になっていました。

だれの日から見ても、男の子はげんかい  
限界でし  
た。

何か手をうつべき時がきたようです。

カラスは心をき  
決めました。

カラスは、うそをつくことにしたのです。



「ぼっちゃん？　ぼっちゃんは小屋に<sup>もとど</sup>戻って、どうか、おやすみくださいませ。いいえ、<sup>しんぱい</sup>ご心配なさらなくても、だいじょうぶでございます、けっこうでございますよ。あとの<sup>さぎょう</sup>作業はわたしがぜんぶ、<sup>のこ</sup>残さずやっておくことにいたしましょう。ですから、どうか、ぼっちゃんは、おやすみくださいませ。なにせ<sup>あした</sup>明日は、たいへんでございますよ」

カラスは、かまわず<sup>つづ</sup>続けました。

「わたしたちの<sup>きず</sup>築きあげたこの<sup>とう</sup>塔が、もうまもなく、あの天のはてにとどくようでございますから」

カラスがそう言い<sup>お</sup>終わるか、<sup>お</sup>終わらないかのうちです。

バンッと音が鳴<sup>な</sup>って、まるで電<sup>でん</sup>流<sup>りゅう</sup>が走<sup>は</sup>ったかのようでした。

勢<sup>いきお</sup>いよく、男の子は、サッと、塔<sup>とう</sup>を見あげました。

まさに、雷<sup>かみなり</sup>のごとく、カラスの「天のはてにとどく」という言<sup>こと</sup>葉<sup>ば</sup>があたりに響<sup>ひび</sup>きわたり、男の子をはげしく、体のしんからはげしく、ブルルッと、ゆさぶったのです。

目を凝<sup>こ</sup>らして見あげてみても、塔<sup>とう</sup>の先はまるで見えません。

男の子の耳にはもう、カラスの声はとどいていませんでした。

今から行くよ。

ぼくは行くよ。

<sup>ま</sup>待ってて。

行くまで<sup>ま</sup>待ってて。

<sup>ま</sup>待っててみんな。

<sup>ま</sup>待ってて。

男の子はカラスが止めるのも聞かず、  
いっしんふらん<sup>とう</sup>のぼ<sup>のぼ</sup>に塔を登りはじめました。

とう<sup>とう</sup>塔をぐるっとまわって上にあがっていく  
長い長い坂道<sup>さかみち</sup>は、風が駆けぬけるような目<sup>か</sup>  
にも止まらぬ速さ<sup>はや</sup>で一気に走って、あがっ  
ていきました。

いったい男の子のどこに、そんな力が  
のこ<sup>のこ</sup>残っていたというのでしょうか。

あとを追いかけるカラスは、男の子につ  
いていくのがやっとでした。息<sup>いき</sup>を切<sup>き</sup>らせて  
懸命<sup>けんめい</sup>に、黒いつばさを羽<sup>は</sup>ばたかせていまし  
た。

やがて、道は途切れます。

そこから先は塔が細すぎて道を作れなかったのです。

そこにはまだ男の子が運んできたかけらが山のように積まれていました。

ここから先は塔をよじ登っていかなければなりません。

男の子は塔をよじ登りはじめていました。

「ぼっちゃん？ そんなに急がなくてもだいじょうぶでございます。ハア……、ハア……、だいじょうぶでございますよ」

カラスは息<sup>いき</sup>もたえだえなようでした。

「ぼっちゃん？ 塔<sup>とう</sup>はまだ天にはとどいて  
おりません。まだできていないのでござい  
ますよ。お願<sup>ねが</sup>いでもうございますから、ぼっचा  
ん、また明<sup>あした</sup>日に……、また明<sup>あした</sup>日にいたしま  
しょう？」

カラスがもう何を言っても無<sup>む</sup>駄<sup>だ</sup>なよう  
でした。

それでもカラスは男の子のまわりを、ぐ  
るぐるとまわりながら、何<sup>なんど</sup>度も何<sup>なんど</sup>度も同じ  
ことを言<sup>い</sup>って男の子を思<sup>おも</sup>いとどまらせよう  
としていました。

「ぼっちゃん？ 下におりましょう？

<sup>きけん</sup>危険でございますよ。本当に、本当に、

<sup>きけん</sup>危険なのでございますよ」

でも男の子の心の中には、そうしたカラスの<sup>ことば</sup>言葉は、いっさいとどいていないのです。

<sup>ま</sup>待っててみんな。

<sup>か</sup>駆けめぐっていたのは、そうした思いだけでした。

それは、なによりもはげしく、また、強い思いでした。

男の子が登<sup>のぼ</sup>るにつれて、塔<sup>とう</sup>はますます細くなっていきました。

男の子が手をかけただけで、塔<sup>とう</sup>がしなるようになっていました。

カラスが言うまでもなく、だれがどう見ても危<sup>き</sup>険<sup>けん</sup>でした。

でも男の子には、そういったことはいつさい関<sup>かん</sup>係<sup>けい</sup>なかったのです。

男の子は、ただ、ただ、上を見ていました。

その先に行けば、自分と同じ人の子が、たくさんいるのです。

その先に行けば、夜はやがて明けて、空が明かるくなるのです。



その先に行けば、カラスたちがいつせいに、<sup>と</sup>飛び立っていくのです。

上を上を。

上を目ざして男の子が<sup>のぼ</sup>登っていきます。

ただただ上を目ざして男の子は、<sup>とう</sup>塔を<sup>のぼ</sup>登っていったのです。

<sup>きけん</sup>危険をかえりみずに。

ぼくはね、カラスさんに、聞いたんだよ。

人の子には、男の子と、女の子が、いる  
んだって。

たくさん、たくさん、いるんだって。

会いたいなあ。

会いたいなあ、ぼくと同じ、子どもたち。

それからね、こんなことも、聞いたんだよ。

ぼくより、もっと、ずっと、ちっちゃい  
子は、あかちゃんて、言うんだって。

それでね、あかちゃんは、みんな、お母<sup>かあ</sup>  
さんから、生<sup>う</sup>まれてくるんだって。

ああ、お<sup>かあ</sup>母さん。

お<sup>かあ</sup>母さん、お<sup>かあ</sup>母さん、お<sup>かあ</sup>母さんだつて。

ぼくにも、お<sup>かあ</sup>母さん、いるのかな。

上に行けば、ぼくにもお<sup>かあ</sup>母さんが、<sup>ま</sup>待っているのかな。

<sup>ま</sup>待ってて、今、行くから。

<sup>ま</sup>待ってて。

<sup>ま</sup>待ってて、みんな。

<sup>ま</sup>待ってて、ぼくの、お<sup>かあ</sup>母さん。

<sup>ま</sup>待ってて……

カラスはまだ男の子を<sup>たす</sup>助けられるものと  
<sup>しん</sup>信じていたようです。

でもそれは、かなわぬ<sup>のぞ</sup>望み。

<sup>くず</sup>崩れはじめた世界の<sup>ほうかい</sup>崩壊を止めることは、  
だれにもできないのです。

<sup>とう</sup>塔は<sup>くず</sup>崩れ、男の子は<sup>ち</sup>地に<sup>す</sup>吸い<sup>こ</sup>込まれるよ  
うにして<sup>お</sup>落ちていきました。

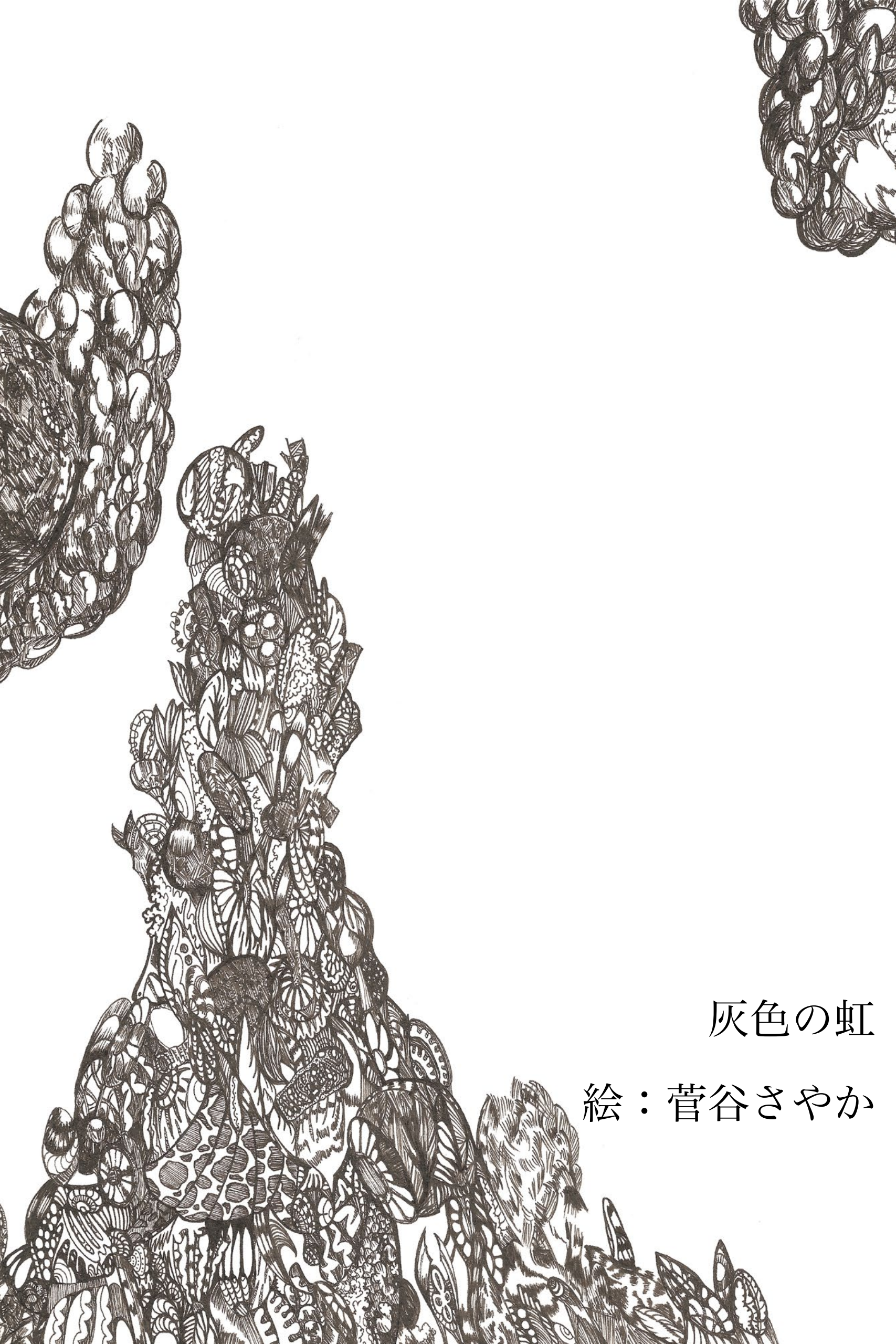
それは一瞬<sup>いつしゅん</sup>の<sup>できごと</sup>出来事でした。

そしてカラスの見まちがいでなければ、  
このときカラスは<sup>にじ</sup>虹を見ているはずです。

男の子は<sup>にじ</sup>虹になったのかもしれませんが。

でもその<sup>にじ</sup>虹も、すぐに<sup>き</sup>消えてしまいまし  
た。

降りしきる世界のかけら以外には何も  
ない、灰色の世界です。



灰色の虹

絵：菅谷さやか





# なかのたいとう

ねん ほっかいどう う 1970年 北海道生まれ。 どうわさつか 童話作家。

ねん ご せかい い こ 100年後の世界に生きる子どもたちにむ

いて、今伝えなければならないことをテーマに、童話、  
じどうしょうせつ か 児童小説を書いています。 しゅみ しさく 趣味は思索。 ロマンチスト。  
くうそうしょうねん げんざい かつどう ちゅうしん 空想少年。 現在の活動の中心は ブログ と 東京の 秋葉原  
になります。

2012年 9月 THE TOKYO ART BOOK FAIR 2012 出展

ブログ <http://ameblo.jp/nakanotaito/>

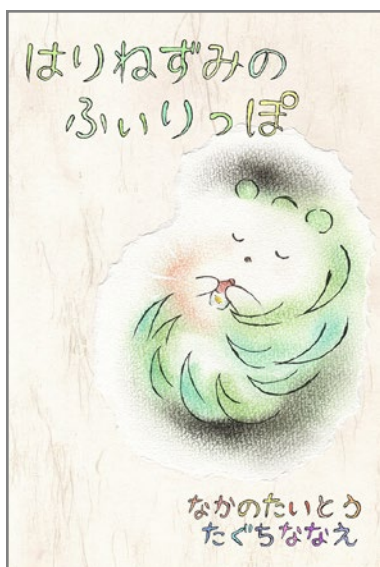
メール [nakanotaito@me.com](mailto:nakanotaito@me.com)



## 『雪だるまのアルフレッド』

なかのたいとう 作 和華 絵

ゆき じょうおう ちゅうじつ 雪の女王の忠実なしもべとして ごくあくひどう かぎ 極悪非道の限りをつくしてい  
た雪だるまのアルフレッドは寝ている子どもたちを襲い、そ  
の幸せな夢を奪っていた。ところがある日、夢を奪おうとし  
たアルフレッドは、その女の子に恋をしてしまう。運命の  
はぐるま いま おお か 歯車が今、大きく変わりはじめる...



## 『はりねずみのふいりっぽ』

なかのたいとう 作 たぐちななえ 絵

「あのう、ぼくのこころをしりませんか？」  
「ほほほ、おかしなことをきくものです。こころなら、ほら、  
そこにあるじゃないですか」  
よる もり なか 夜の森の中をふいりっぽは心を探してまわります。 明かりは  
て 手にしたランプの中で なが ひか ほたる 光る蛍のじじだけ。 夜はしだいに更け  
ています。 ふいりっぽのこころは見つかるのでしょうか...



# すがや 菅谷さやか

ねん いばらきけん う 1986年 茨城県生まれ。 もよう が か 模様画家。

2009年 7月 茨城県銚田市市長に絵『ひまわり』を寄贈

2010年 4月 オーストラリア Melbourne 展覧会 出展

2012年 5月 新宿 apARTment 出展

もよう せん て が か しゅみ おんがく え  
模様や線を手描きで描いています。趣味は音楽&絵の  
さが  
ネタ探し。ロマンチスト。いま さみ  
ブな性格を治してポジティブになれるようがんば  
ります。

ブログ <http://ameblo.jp/tomatogallery/>

Gallery <http://www.artspace-keika.com/>

メール [sugaya-s@yellow.plala.or.jp](mailto:sugaya-s@yellow.plala.or.jp)



はいいろ にじ  
灰色の虹

さく  
作  
え  
絵  
でんししよせきばんさくせい  
電子書籍版作成

なかのたいとう  
すがや  
菅谷さやか  
なかのたいとう

はっこうび  
発行日  
はっこうしゃ  
発行者

ねん がつ にち でんししよせきばんだい はん  
2013 年 3 月 15 日 電子書籍版第 1 版  
イーパブスドットジェーピー パブ リ ッ シ ン グ  
ePubs.jp Publishing  
とうきょうとたいとうくたいとう  
〒110-0016 東京都台東区台東 1-19-11-101B  
<http://publishing.epubs.jp/>

"Gray Rainbow"

Text by copyright © 2010, 2012 NAKANO TAITO  
Illustrations by copyright © 2012 Sayaka Sugaya

All rights reserved. No part of this publication may reproduced, distributed, or transmitted in any form or by any means, or stored in database or retrieval system, without the prior written of the publisher.

Published by ePubs.jp Publishing  
1-19-11-101B, Taito, Taito-ku, Tokyo, Japan  
<http://publishing.epubs.jp/>